

審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

昨年、2012 年は宇吉郎没後 50 周年の節目の年であり、記念のシンポジウムなど様々な催しが行われました。先日、「中谷宇吉郎森羅万象帖」という展覧会を見る機会があり、あらためて自然現象の神秘、森羅万象に驚嘆と憧憬の念を持ち続けた科学者の眼差しに、そして氏のさまざまな業績に畏敬の念を抱くとともに、雪の結晶の研究のみならず、大学卒業後に飛行船の爆発事故の原因究明に端を発した「長い電気火花の形及び構造の研究」というスパークの研究テーマに携わったことを知りました。

その数々の実験を伴った強烈且つ実に美しい映像に接して、改めて宇吉郎の「形の物理学」のもう一つの世界に触れたことは、新鮮な体験でした。

『自然というものは、非常に複雑で、不思議なことにみちているものである。… こういう複雑な現象を一つ一つ明かして行くときに、はじめて人間は自然の美しさを本当に理解出来るのである』の言葉どおり、ものやものごとの原理や構造を理解してその上で自分のイメージを膨らませて行くことの妙味、醍醐味を痛感するものです。スパークの瞬間の画像と雪の結晶と発生する環境は違えども、自然現象をとらえる科学者の目と芸術する心を持ち合わせていた人です。

デザインも「美」と「科学」との融合を通じて豊かな暮らしの環境を追求する事に有ると思います。

雪の結晶や氷をテーマにして、クラフトやデザイン全般を取り込んだ内容のこの雪のデザイン賞は、他に類を見ないものに育ってきました。

第7回目を迎えるに当たり、他のコンペティションの施行例に習ってエントリー料が設けられたことにより、危惧されたように今回は少々応募点数が減少しましたが、しかしその内容に関して、結果ボトムアップされることになり、作品のレベルがそろってきたように感じます。

そして多岐にわたる素材や手法を駆使した生活道具やオブジェ、アートピース、等とその内容には魅力あふれるものが多く、常連の方と新しく応募頂いた人の作品が半々のようにみうけられ、新しいタイプの作品も目につきます。そのアイデアや技術も回を重ねる毎にすぐれたものが排出して来ています。CGの作品が印象的であり、また地域柄か今回も茶道具で魅力的な作品が多く見受けられました。

今回の一次審査もまず送られてきた 212 作品のビジュアル情報をもとに、44 点が入選として通過、二次審査は例年同様当科学館にて、現物作品を並べて審査を致しました。ディスカッションを重ねながら、それぞれの作品の理解を深め、最終的に金賞、ラネージュ賞、銀賞、銅賞、各 1 点と奨励賞 5 点、佳作 12 点が選出されました。

今回のグランプリに輝いた、米本優曜さんの「Metamorphose」は、前回のグランプリであった磨き出した 5 角柱のガラスの間にあしらった精緻な截金ガラスの作品が印象に残りますが、それとは又違った力強いもので、透過率や反射率の異なった板ガラスを積層して、そのガラス塊を捻ったように切削、研磨したフォルムの醸し出すガラスの表情は、光の屈折であたかも氷が溶解するように見えて美しく感動的です。

ラネージュ賞を得た、石原 薫さんの「夜の雪」のタペストリーは、深々と雪降り積もった夜の寒空の暗闇の中に浮かび上がる白い雪道のモノトーンな景色

を表現している。緩い横糸を櫛引で仕上げた風情ある作品で、凍える様な夜の景色の中に、暖かみを感じられる。

銀賞の SouMa さんの「雪と氷のガーデン」は、窓から眺めた庭の雪景色をつなごうとした一枚の白い紙を折り曲げた襞と、実に精緻に切り取られた雪の結晶や氷柱を、真っ白で無垢な中に繊細な技術の盛り込まれたメルヘンな世界を表現したユニークな作品です。

銅賞の三宅宏明、油井美奈子さんの「SNOW COLOR CHART*」は白銀の世界にはその白い色の中に光を通してさまざまな色彩を感じられるものです。その雪の色を日本の感性を通して、日本の伝統色でグラフィカルに表現したパネルで、多様な使用法が考慮されています。

奨励賞、佳作に輝いた各作品も、いずれ劣らぬ力作で雪や氷のイメージの広がりが魅力に溢れるものでした。